

19. 看護部と看護学科の連携

横浜市立大学附属市民総合医療センター 野水 桂子

【背景】

横浜市立大学は、附属2病院と看護学科をもつ組織である。看護の専門的な質向上、及び発展には、臨床と教育の場が有機的な繋がりをもちつつ、さまざまな情報交換やお互いの特徴を活かした連携が重要である。そこで、連携の推進を検討するために平成20年度より附属2病院の看護部管理職と看護学科の教員を委員として連携会議は開始された。当初、会議は定例化していたが徐々に開催回数も減少し形式的な会議となっていた。連携会議の委員長は2病院教育担当副看護部長と看護学科臨地教育・連携推進カリキュラム長が1年毎に交代で担う。本年度は当院が委員長及び事務局を務める順番である。

私は委員長として、1. 連携の推進を如何に図るか、2. 21年度に連携会議で明文化された「臨地実習における学科と臨床の役割」を基に臨床実習指導の協力体制をつくり、より良い実習環境を整える対策を考えることが課題である。

【実践計画】

1. 連携会議の運営に関する計画；

1) 年間の活動日程・計画の立案と、会議開催時は柔軟に意見交換ができる雰囲気づくりに努める。

2) 会議招集の委員は看護職のみであるが横浜市立大学全体で取組む体制の整備をするために構成委員を再検討する。

3) 連携会議での検討事項や其々に看護部と看護学科との協働内容の実態把握・集約と広報する。

2. 「臨地実習における学科と臨床の役割」の運用と実習指導環境の整備に関する計画；

1) 附属2病院と看護学科の合同で、臨床実習指導研修会を開催する。

2) 各施設の臨床実習指導委員会にて、学習会をもち周知する。

【結果】

1. 連携会議の運営について

1) 会議を定例開催し、議事は会議規程に基づき所掌事項の教育・研究に関することについて検討した。教育については、看護師全員が臨床指導（附属2病院の方針）を担うために臨床看護師の指導能力の向上を図り、よりよい実習環境を作り上げていくためどのような課題があるのか、課題解決のための取り組み内容について議論した。臨床実習指導者と学科教員との臨床現場での綿密な連携と共に学ぶ姿勢で協同を進めることが、指導者育成に繋がる基盤となること、教育的視点の質を高めることの意見が出された。さらに指導者育成のため現実の臨床実習の場での課題を共有し日々課題解決に向けていく過程で、学科教員と臨床看護師の合同の臨床指導研修会の立ち上げが討議された。

共同研究については、実際には学科教員と臨床看護師（あるいは病棟）との間で既に取組まれているものもあり、連携会議の中で報告をしながら全体を掌握できるようにする。また、共同研究に取組む仕組み作り等について明文化をしながら、「共同研究しやすい仕組み作りすること」で発展的に考えることができる。さらに各組織に広報するなど討議された。

2) 横浜市立大学の附属2病院と看護学科の3施設での連携を促進するためには、委員の構成を事務職にも担ってもらおう等、委員の拡大が必要であると連絡協議会（連携会議の上部

会議)で討議された。結果、委員は事務管理職が各施設より1名選出され課長級3名、さらに看護管理職4名が増員された。第3回会議(7月)より、この体制となった。あわせて検討議題に附属2病院への就職に関する項目も追加指示があり、学生の就職対策(キャリア支援)も加わった。

3) 連携実態を広報するために、ニュースレターを作成した。プロジェクトを立ち上げ(メンバー3名を附属2病院・看護学科より各1名選出)、看護部と看護学科との連携の実態調査を行った結果、「学科教員と臨床看護師の共同研究」「教員の臨床における実践」「院内研修の講師派遣」「研究指導」「附属2病院から看護学科への講師派遣」の5つのカテゴリーに分類されて、42項目の連携実態が明らかになった。この内容と各施設の最近のトピックスを編集した「News Letter - ザ・れんけい -」を、H22.12月に創刊し、10000部配布した。

2. 21年度に作成された「臨地実習における学科と臨床の役割」の浸透と実習指導環境の整備について

1) 臨床実習指導者の指導能力を高め、より良い実習環境^{るために}、臨床実習研修会の開催を検討した。「教員が教える—看護師が聞く」というスタンスではなく「共に学ぶ」ことを通して、実習時の協力体制及び良好な実習環境づくりに繋げることをねらいとし、研修名は「附属2病院と看護学科合同臨床実習指導研修会」とした。

2) 研修の実際は、プロジェクト(メンバー;附属2病院・看護学科より各2名選出)を立ち上げ、対象は1回目「臨床実習指導者と臨地実習担っている教員」、2回目「CDP2~3段階(受持ち看護師クラス)看護師と教員」して2回開催した。研修の参加者は、1回目51名(内訳;附属2病院の臨床実習指導者41名、看護学科准教授・助教10名)、研修方法は、研修性5~6名(臨床・教員混合)グループとして、グループワーク・全体発表とした。テーマは、実習指導で実感している内容・疑問・課題・学生の捉え方を表出することと、「臨地実習における学科と臨床の役割」の確認と今後の実習指導の方向性について議論し共有した。2回目の参加者は42名(内訳;附属2病院の臨床実習指導者35名、看護学科准教授・助教7名)で、研修方法は1回目同様で実施した。テーマは自分の実習体験を振り返ること、現在学生指導場面や関わりを通じて自分の実習体験とどのような違いがあるか、学生にどのような看護を体験させたいかなどとした。終了後アンケート結果から、研修目標は95%が達成できたと答え、感想・意見には、臨床看護師と教員が話し合うことで同じ方向を向いて指導にあたっている同士とを感じる事ができたなど、前向きな意見が多くあり、次年度への継続を示唆される内容であった。

【評価及び今後の課題】

1. 会議は定例化できた。議題も所掌事項以外に各組織でのトピックス等も共有できた。また、新たな連携を看護学科統合カリキュラム長より提案され、1年次授業「看護の統合と実践I」を附属2病院で受け入れ、看護実践の紹介と看護実践場面見学の体験と共有をH23年度から開始する予定である。

2. 連携活動の広報誌「News Letter - ザ・れんけい -」は、看護職員以外にも、学生や事務職員等にも連携の周知・協力を効果的であり、今後も継続し、夏頃に2号を発刊する予定である。

3. 臨床実習指導者研修は、指導能力の育成に効果的な学びが意見できていた。次年度も

研修を通じて今後の実習環境を向上させるために継続する。課題は、指導の連続性を担保する体制の検討や臨床看護師と教員とのコミュニケーションと連携、さらに附属 2 病院の臨床看護師間連携などを調整する視点（指導のマネジメント）での指導者育成が必要である。

参考文献

- 1) 原田広枝：看護実践施設と看護学校の連携に関する研究-看護学校文化と実習指導者文化の現状と関連-、九州大学教育経営学研究紀要、第 7 号、P17-28、2004
- 2) 屋宜譜美子・目黒 悟：教える人としての私を育てる-看護教員と臨地実習指導者-、医学書院、2009
- 3) エドガー・H・シャイン：金井壽宏、金井真弓訳、人を助けるとはどういうことか-本当の「協力関係」をつくる 7 つの原則-、英治出版、2010